

弁ぜざるの弁

田丸徳善

東大での18年の生活がもうすぐ終わると思うと、月並みな表現ながら、複雑な思いを抑えることができない。今こうしているということが、すべて夢のような気がする。去る2月7日(木)には、学生諸君はじめ、多くのOBや先輩にきてい

ただいて、恒例の「最終講義」をすませることができた。その際、出席者の方々からは、いろいろと暖かい言葉をいただき、また本冊では、やはり多くの方々から心のこもった文章をお寄せいただいた。この場を借りて、まず以てお礼を申しあげ

たい。

これらの方々は、多分、この特別の折りだからということで、私に対してかなり手加減し、いろいろ至らない点を大目にみていただいたに違いない。それはそれとして本当に有り難く、ただ感謝あるのみである。だが、それと同時に、私としてはいつも、自分がこの職場にいることに何となく落ち着かない思いだったということを、ここで告白しなければならぬと思う。

東大に奉職することがどういうことか、最初から分かっていたわけでは勿論なかった。それが何となく実感できるようになったのは、恐らく、外国から帰って助手をしていた時だったかと思う。それはちょうど岸本先生の最晩年に当り、先生が自ら「手負いの獅子」と形容されたような、猛烈な勢いで仕事をされていた頃である。それをはたで見ながら、自分には到底このような真似はできっこない、と身に染みて感じたことを思い出す。

そもそも東大の教師たる者は、いろいろな資質をもたなければならぬ。ある水準の学問ということは当然として、それ以外にも多くのものが要求される。私は、柳川さんがあの「異説 宗教学序論」でいみじくも書かれたように、宗教学者というものは学界ではなおマイノリティだということを痛感している。東大の教師は、そうした宗教学のリーダーでなくてはならず、場合によっては、日本全国のなかでリーダーシップをとらなくてはならない。私は、自分にそうした役割がつとまるとは、とても考えられなかった。

この際なので、思い切って告白するならば、東大に戻ってこいという話をいただいたとき、私は頑固にそれを拒みつづけた。昭和47(1972)年の11月、ちょうど恒例の宗教学会がおわった直後のことである。その頃、なれない調査で無理をした後遺症もあったのか、健康にも全く自信をなくしていた。そうしたわけで、当時の主任教授だった脇本さん、それに柳川さん、そして1年まえに東大にきていた後藤さんの三人が入れ替り立ち替り説得にきてくださったのに、いつも無駄足をふませていた。

今から考えると、申し訳ない限りながら、どうしてもその気になれなかったのである。それを翻

意する—あるいは、むしろさせられるきっかけとなったのは、ほんの一寸した出来事であった。その年の12月8日—ある年令以上の人には、この日がどんな日かすぐ分かる筈である。伝統的な仏教では成道会に当たるが、もっと身近なところではいわゆる「大東亜戦争」突入の日で、それはいつもラジオから流れてくる軍艦マーチの響きと結びついていた。

その日は、何人かの研究室の先輩と、古稀を迎えられる大島先生の記念事業の相談をする予定であった。その結果、後にできたのが『宗教と歴史』(1977年、山本書店)という題の論文集である。相談がある程度まとまったあとは、例のごとく、渋谷の裏町のごたごたした飲み屋街を飲んで歩いた。もう遅く、かなり酔いも回っていたと記憶するが、とあるバーで、脇本さんが呻くように「おれと心中してくれということだよ」といわれたのである。大げさに聞こえるかも知れないが、この一言がきっかけとなって、私はそれから長い悪戦苦闘の日々に突入することになった。

どういう因縁か、私の世代は絶えずものごとの変わり目にぶつかるといって巡り合わせになっていた。小学校の頃から、たびたび学制の改変に出会い、旧い制度の尻尾にぶら下って、辛うじて卒業するということの繰り返しであった。こうしていつも新旧のあいだの、不安定な場に置かれつけてきたために、我ながら頼りない姿勢が身についてしまったように思う。そこで東大に戻るに当たっても、私は多分、先生たちのような役はつとまらないとすれば、せめて次ぎの新しい世代とのあいだの繋ぎになろうと心にきめたのである。

しかし、このような役割でさえも、その遂行にはいろいろな障害がおおい。なかでも大きいのは、対象の面でも方法の上でもきわめて多様性にとんだ宗教学という学問の性格そのものである。すでに本誌でも二、三の方が取り上げて論じておられるが、それは「師資相承」という形での研究のあり方を難しくするのである。私自身はひそかに、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」(歎異抄)といった行き方をモットーとしてきたつもりであるが、それは果たして正しかったのであろうか。

かつて姉崎先生は、退官にあたっての心境を、

仏典の言葉をひいて「所作已弁」と言われ、『已弁集』を残された。果たすべき義務を弁じ、果たし終えたといわれたのである。私にはとてもそのように言う資格はないが、ただ少なくとも、この役目を次ぎの方々にバトンタッチできることは、本当に幸せと思う。ともかくもこの年月、辛うじ

てなりと責めをふさぐことができたとすれば、それは諸先輩や学生諸君はじめ、多くの方々が支えてくださったからこそである。この機会に改めてお礼申し上げ、退官のご挨拶とさせていただくことにする。